

第二次世界大戦下の米国メディアとジェンダー表象

— 『ライフ』誌が描いた女性たち —

平塚 博子

第二次世界大戦は、参戦国が武力、経済力、メディアのすべてを用いて戦う総力戦となった。アメリカにとってもそれは例外ではなく、日米開戦以降、男女を問わず国民の大規模な動員を強いられることとなった。女性たちも軍人の妻や母として家庭を守るだけでなく、軍需生産はもちろん、場合によっては軍の要員としても動員され労働力として戦時下のアメリカで大きな役割を果たすこととなる。戦時中の深刻な労働力不足という問題を受けて、アメリカ政府は従来男性領域とされてきた領域での女性の労働力の動員を迫られる。メディアが戦時の新しい女性のイメージ作りに大きな影響力を持つものと考えた政府は、新聞、雑誌、映画、ラジオなどのメディアに協力を要請し、多くのメディアがそれに応じた。戦時のアメリカを代表する写真週刊誌『ライフ』も例外ではない。戦時の『ライフ』の女性表象を見ていくと、女性の動員に関する政府のプロパガンダの影響が色濃くみられる。

このようなことを踏まえて、本稿では戦時の世論の形成に大きな影響を与えたと考えられる『ライフ』誌を取り上げ、真珠湾攻撃が行われた1941年12月から終戦を迎える1945年8月までの期間の『ライフ』の表紙と記事を、女性表象に焦点を当てながら分析する。それによって、戦時下の『ライフ』が定義する女性の役割や「女らしさ」を考察し、さらに、女性表象を、その時期の男性表象、人種と絡めて検討することで、第二次世界大戦がジェンダーと人種に与えた影響を、戦時下の『ライフ』がどのように見ていたのか合わせて考えてみる。この時期の雑誌における女性表象の研究としてはすでに、『サタデー・イブニング・ポスト』と『トゥルー・ストーリー』の小説と広告の分析に焦点を当てて、この時期の女性のイメージ作りに関するメディアの影響力を明らかにした、モリーン・ハニーの優れた研究があるが、今回は実在の女性たちの表象を分析することで、この時期のメディアの女性表象研究により多角的な視点を加えることが、本稿の試みである⁽¹⁾。結論を先取りすれば、『ライフ』の女性表象は基本的に、「女性の社会進出は一次的なものであり、戦争という非常時が終われば女性は家庭に戻る」という政府のプロパガンダを踏襲するものであり、勝利が現実味を帯びる1944年以降、母性と家庭を強調してゆく。しかし、同時に『ライフ』が、わずかながらも伝統的なジェンダー規範の裂け目や矛盾をとらえつつ、戦時と戦後のアメリカの人種とジェンダーの複雑な関係を映し出していることも明らかにしていく。

1. 『ライフ』について

具体的な表象を見る前に、まず簡単に『ライフ』について概観する。『ライフ』は、『タイム』誌、『フォーチュン』誌を創刊したアメリカ出版界の大物ヘンリー・ルースによって創刊された写真週刊誌である。すべての記事が写真付きで紹介される「フォトエッセイ」という統一されたスタイルで編集されたこの雑誌は、アメリカにおけるフォトジャーナリズムのさきがけとなる。とくに第二次世界大戦中は、ロバート・キャパなどのカメラマンによる臨場感あふれる戦地の報道で話題となった。記事の内容としてはニュースの他に芸能、ファッション、セレブ、スポーツに関する記事に加え、海外事情やパーティ、暮らしの知恵など一般人の関心事全般が扱われる、男女共に読者対象とする総合誌である。戦時中の発行部数は一週間で400万部といわれ、この時期、前線の兵士から、都市そして田舎を問わず全米中の人々が愛読するアメリカを代表する雑誌として、その地位を不動のものとした⁽²⁾。直前直後の代表者の言文の対照的なるアリスは、戦時中『ライフ』は、

戦時中『ライフ』は、連合国支持を明確に打ち出し、数々の戦争報道記事を掲載することで、フランクリン・ルーズベルト政権下で打ち出される戦時政策を支持していた。『ライフ』の献身的な協力ぶりは、長年同誌の編集者を務めたダニエル・ロングウェルの「もし『ライフ』がなかったら、アメリカ政府は『ライフ』を作りださないといけなかつただろう」という言葉からも伺える⁽³⁾。『ライフ』の表紙や記事における戦時下の女性の戦時活動、戦争協力の表象を見ても、戦時情報局の方針に沿うものであることがわかる。その方針とは、戦時の労働力の不足に合わせて従来女性領域とされていなかった軍隊、軍事産業での就労を女性に促すと同時に、女性に与えられた新しい役割はあくまで一時的なものであり、戦争という非常時が終われば女性の居場所は家庭であるというものだ。

2. 『ライフ』の表紙におけるジェンダー表象

ここでは、『ライフ』の表紙におけるジェンダー表象はどのようなものだったのであろうか。モリマン・ハニスは、戦時の『サタデー・イブニング・ポスト』と『トゥルー・ストーリー』の小説と広告における女性表象の研究の中で、この時期に作り上げられた複雑な女性のイメージは戦時プロパガンダ、ジェンダー規範、階級が互いに影響しあいながら生みだされたものであることを明らかにした。さらに、メディアと政府と産業界が一丸となったときに、どれだけ迅速にイメージの転換が図られるかということも指摘している⁽⁴⁾。戦時の『ライフ』のジェンダー表象にも、戦時の女性像の変換に対する政府とメディアの影響の大きさが示されている。真珠湾攻撃があった1941年12月から終戦を迎える1945年8月の『ライフ』の表紙の男女別登場回数の内訳を見てみると図表1のようになる。図表1を見てみると、この時期、『ライフ』の表紙に登場するのが男性であれ女性であれ、その表象に戦

時の影響がみられるものの、男性と女性では影響の受け方が異なっていることが分かる。

図表 1

『L I F E』表紙分布数

期 間 (表紙枚数)	1941/12-1942/12 (57)	1943/1-1943/12 (53)	1944/1-1944/12 (52)	1945/1-1945/8 (35)
女性	19	19	19	12
軍人	0	2	0	0
非戦・従軍看護師	1	0	1	0
生産	0	1	0	0
軍人援護	3	2	1	0
母・妻・娘	1 (妻・戦時)	2 (妻・戦時)	1	1
芸能・ファッション・スポーツ	13	11	16	9
男性	28	26	25	17
軍人・兵士	18	11	17	8
政治家	1	1	2	1
生産	3	1	0	0
芸能・スポーツ	0	1	2	1
その他	8	1	6	4
武器	3	0	3	2
男女	2	7	2	2
戦時	1	5	0	0

まず男女別登場回数を見てみると、1941年12月から翌1942年12月までの期間の57誌で女性が表紙を飾った回数は19回、男性が28回、1943年1月から12月までの53誌中、女性が19回、男性は26回、1944年1月から12月までは52誌中、女性が19回、男性は25回、1945年1月から8月までの35誌中、女性は12回、男性は17回という結果がでた。戦時中の4年間を通じて女性が30%半ば、男性が約50%の割合で『ライフ』の表紙を飾っている。

次に職業別を見てみると、男性については、戦時中を通じて圧倒的に軍人、または兵士が登場する割合が高い。1941年12月から1942年12月までに表紙に男性が登場した総数は28回でそのうち、軍人・兵士が18回(64%)、1943年には26回中11回(42%)、1944年には25回中17回(68%)、1945年には17回中8回(47%)と軍人・兵士の占める割合が極めて高い。軍人ではない場合でも、戦時の国家を動かす政治家や、軍事工場または食糧増産などの生産活動に従事する男性が登場し、この時期の『ライフ』の表紙に登場す

る男性は、前線で勇ましく戦い、祖国のために力を尽くす男らしさや愛国心をイメージさせる男性が数多く登場している。

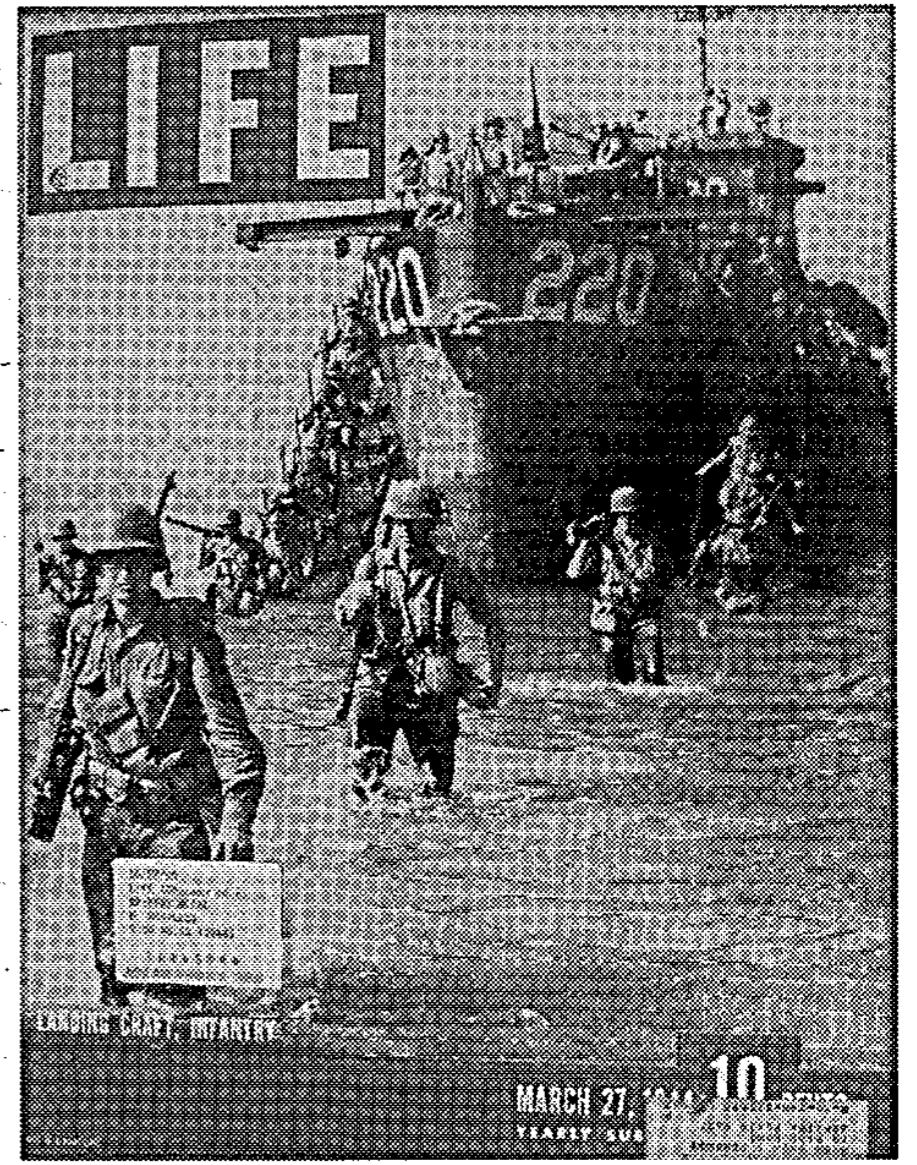
写真1



1942年5月18日号



1943年11月22日号



1944年3月27日号

男性と同様に表紙の女性表象にも戦時の影響が表れている。表紙における男性の表象が戦時中を通じてほとんど変わらないのに対して、女性の場合はアメリカをめぐる戦況の変化に影響を受けている様子が伺われる。『ライフ』の表紙に登場する女性で圧倒的に多いのは、美や癒し、そして娯楽などを象徴する、女優、モデルなどの芸能人、ナイトクラブのショー・ガール、さらにはスポーツ選手である。例えば1941年12月から1942年12月までに表紙に登場した女性の中で、芸能・ファッション関係の女性が登場した回数は13回で、その割合は全体の68%、1943年では11回で57%、1944年では16回で84%、1945年では9回で75%とこの時期6割から8割の割合でこうした職業の女性たちが登場する。しかし、芸能人に比べて数こそ少ないにせよ、この時期の『ライフ』の表紙には、前線、銃後と様々な形で戦時活動に従事する女性たちが登場している。まず1941年12月から1942年の12月にかけて、従軍看護婦が1回、ボランティアなどの軍人援護が3回登場する。1943年になると、実際に軍人として働く女性が2回、軍事工場で働く女性が1回、それからボランティアとして戦争協力する女性が2度登場する。この時期表紙に登場する、妻や母といった家庭人の中にも戦時の影響が表れていて、1942年には戦地に赴いた夫をさびしく待つ妻が登場し、1943年には夫が戦地から送ってきたエキゾチックな装飾品を身にまとう妻が1回登場する。さらに、女性単独ではないものの、1942年と1943年には軍人を慰問する女優や軍人に寄り添う妻などの女性たちも登場する。それが1944年以降

になると、表紙に登場する女性たちから戦争の色はほとんどなくなる。前線、銃後と合わせて、1941年12月から1942年12月までは4回、1943年1月から12月までは5回登場していたのが、1944年になると2回、1945年には0回と激減している。1944年の表紙をくわしく見てみると、1月3日号の表紙に陸軍のエンジニアが登場するが、戦時活動に従事している様子ではなく、休暇でアラスカでスキーを楽しむ様子が報じられている。

写真2

女優



1942年3月30日号



1943年5月24日号



1944年2月28日号

写真3

女性軍人

写真4

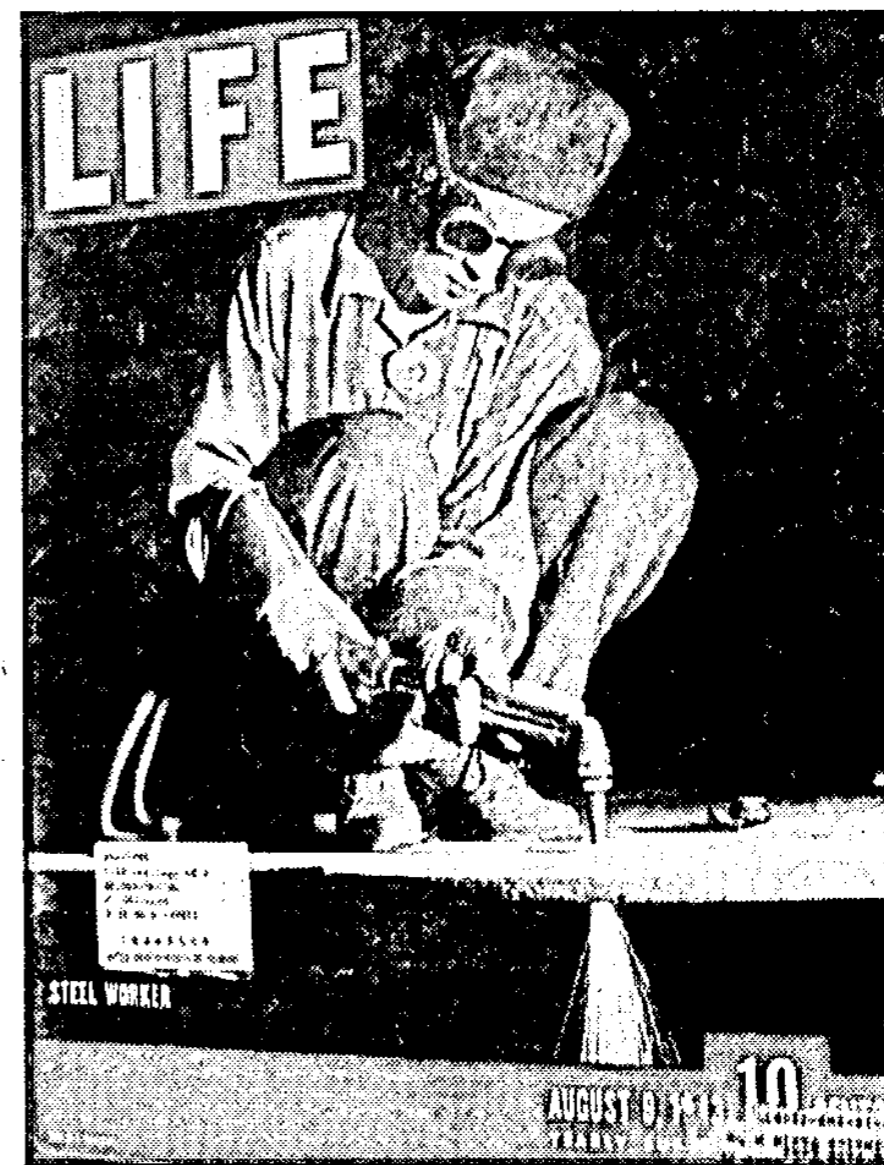
軍需工場女性労働者



1943年3月15日号



1943年7月19日号



1943年8月9日号

表紙に表れたこうした変化は、当時の戦況に影響を受けていると考えられる。まず、太平洋戦線において、開戦当初こそ苦戦したものの、1942年6月のミッドウェイ海戦での勝利以降アメリカ軍は南西太平洋において優勢を保ち、1944年7月のサイパンでの勝利によって日本の敗色を決定的なものとする。ヨーロッパ戦線においては、1943年9月に、枢軸国の一つであるイタリアが降伏、さらに1944年6月のノルマンディー上陸によって連合国側は大きく勝利に近づくことになる。このように、1944年という年は、総力戦によって従来のジェンダー規範の修正を余儀なくされてきたアメリカが、ジェンダーロールも含めた戦後の社会の在り方を現実的に考えられるようになった時期だといえる。1944年以降『ライフ』の表紙に登場する女性も、戦時という非常時によって再編された女性の役割が、戦争の終わりとともに従来に戻ることを示している。

従来のジェンダー規範への回帰という点で興味深いのが、1944年5月22日号の表紙に登場する「モデル・マザー」という女性である。写真では、美しい母親が子供をおぶってにこやかにほほ笑んでいる様子が写し出されている。この表紙の紹介文には、「プロのモデルのエドワード・リード夫人は母親業がモデルという仕事の邪魔にはなっていない」と書かれている⁽⁵⁾。1942年、1943年と『ライフ』の表紙が、家庭を戦時というモチーフと合わせて強調していたのに対し、ここに来て、戦時というモチーフは消えて、そのかわり美と母性というモチーフとともに家庭を表象していることがわかる。

写真5 母



「モデル・マザー」1944年5月22日号

3. 『ライフ』の記事におけるジェンダー表象

1944年以降の『ライフ』の表紙の女性表象に見られる既存のジェンダー規範への回帰、女性＝家庭そして母性という傾向は、記事により顕著に表れている。1941年12月から1945年8月までの『ライフ』の記事に登場する女性たちの分類と登場回数を調べてみると図表2の結果となった。1941年12月から1942年12月まで、さらに1943年1月から12月までに女性の軍人が登場する回数はそれぞれ、6回と10回である。それが1944年1月から12月までの期間になるとその数はかなり減って、登場回数は1回となり、1945年1月から8月の期間は2回である。同じような傾向は軍事工場など生産活動、さらにボランティアなどの軍人援護に従事している女性の登場回数にも見られる。生産活動に従事している女性の登場回数は1941年12月から1942年12月の間に13回、1943年1月から12月までの期間は11回なのに対し、1944年1月から12月の間は4回、1945年1月か

ら8月にかけては0回と1944年以降大きく減っている。さらに軍人援護活動に関しては、1941年12月から1942年12月の期間に29回取り上げられているのが、1943年1月から12月の期間になると約半減の15回、1944年と1945年の1月から12月にかけてはさらに減ってそれぞれ5回しか登場しない。農業を除いたアメリカの女性の就業数は、真珠湾攻撃直後の1942年1月は1176万人だったのが、1944年7月には1644万人となり合衆国史上最高を記録している⁽⁶⁾。さらに、1944年に行われた別の調査では、軍事産業に従事している女性の75%から80%が戦争に勝った後も仕事を続けたいと答えている⁽⁷⁾。このような事実を踏まえれば、『ライフ』記事にみられる1944年以降の女性の表象は当時の女性を取り巻く状況とはかけ離れているものと言える。

図表2

『L I F E』記事女性登場回数分布表

	1941/12-1942/12	1943/1-1943/12	1944/1-1944/12	1945/1-1945/8
軍人	6	10	1	2
従軍看護婦	1	3	4	1
非戦	2	1	0	0
生産	13	11	4	0
軍人援助	29	15	5	5
生活	4	3	0	0
民間防衛	6	2	0	0

1944年以降の『ライフ』の記事に登場する女性たちを見てみると、働く女性はほぼ女優やファッションモデル、ショー・ガールに限定され、それ以外の一般の女性が登場する場合は、戦地にいる息子や夫を待つ母や妻、または普段の家庭生活を送る、妻、母、女子学生がほとんどとなる。つまり、1944年以降の『ライフ』には、一般の女性の役割は職業人ではなく妻、母であり、女性の居場所は家庭であるということがより明確に表れている。こうした『ライフ』の姿勢は、働く女性を扱った1943年8月9日号の「鉄鋼所で働く女性」という記事にも表れている。この記事は「ゲーリー鉄工所で働く女性は、変わり者でも未熟でもない。」と女性の軍事産業での就労を促している。しかし同時に記事は次のように

写真6



「鉄鋼所で働く女性」
1943年8月9日号

結んでいる。「平時になったらもう一度家庭に戻るかもしれないが、危機に際したときアメリカの女性にとってつらすぎる仕事などない。」女性の就労を促しながらも、この記事は「平時の女性の居場所は家庭」ということを示唆していることが分かる⁽⁸⁾。

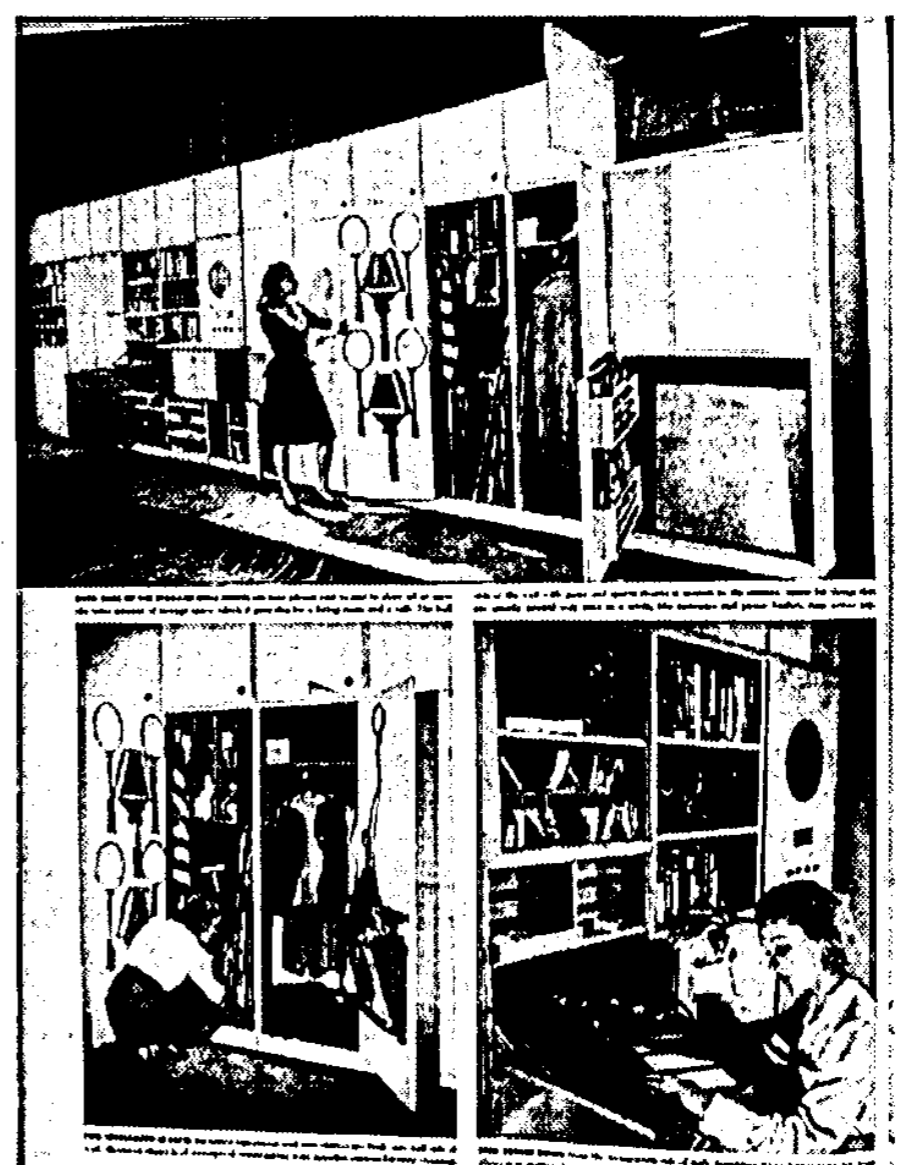
戦後のアメリカ女性の居場所＝家庭、女性＝母性という概念は『ライフ』の戦後の生活を意識したいくつかの記事の中にも表れている。戦時中の『ライフ』は、ほぼ毎号「モダンリビング」または「ウォーリビング」というセクションを設け、流行のファッションや暮らしの知恵などを扱った記事を掲載している。しかし、アメリカの勝利がほぼ確定的となる1944年7月の約1年前の1943年8月9日号だけ、このセクションが「ポストウォーリビング」と名前を変え、改良されて使いやすくなった台所や台所用品を扱った「明日のキッチン」と題された記事が掲載されている。さらに、1945年1月22日号には『ライフ』誌史上初の住宅を扱った特集が生まれ、1945年5月28日号では、「ホームプランニング」についての24ページにわたる特集が組まれている。こうした特集記事の中には、家の様々な場所で家事を切り盛りする母や妻の姿が掲載されている。母性についても、一般人の母親たちに加えて、芸能界という華やかで一見母性とは結びつかない世界にいる人々が母親業に励む姿が取り上げられている。例えば、1944年1月10日号では、ハリウッドセレブたちの幸せな家庭生活の記事が取り上げられているが、写真で取り上げられているのは父親ではなく、すべて芸能界で活躍しつつも母としての義務を怠らない美しい母たちである。1944年5月22日号では、先ほど表紙のところで紹介したモデルの母たちが記事として取り上げられ、その中で「母親であることが、美を保つのに役立っている」というような内容が書かれている。こうした記事は、母性や家庭、核家族という概念を戦後のアメリカのジェンダー規範として読者に強く印象づけるものと言える。

写真7

家庭



「明日のキッチン」1943年8月9日号



「アメリカンホーム特集」1945年1月22日号

写真8



「モデル・マザー」1944年5月22日号



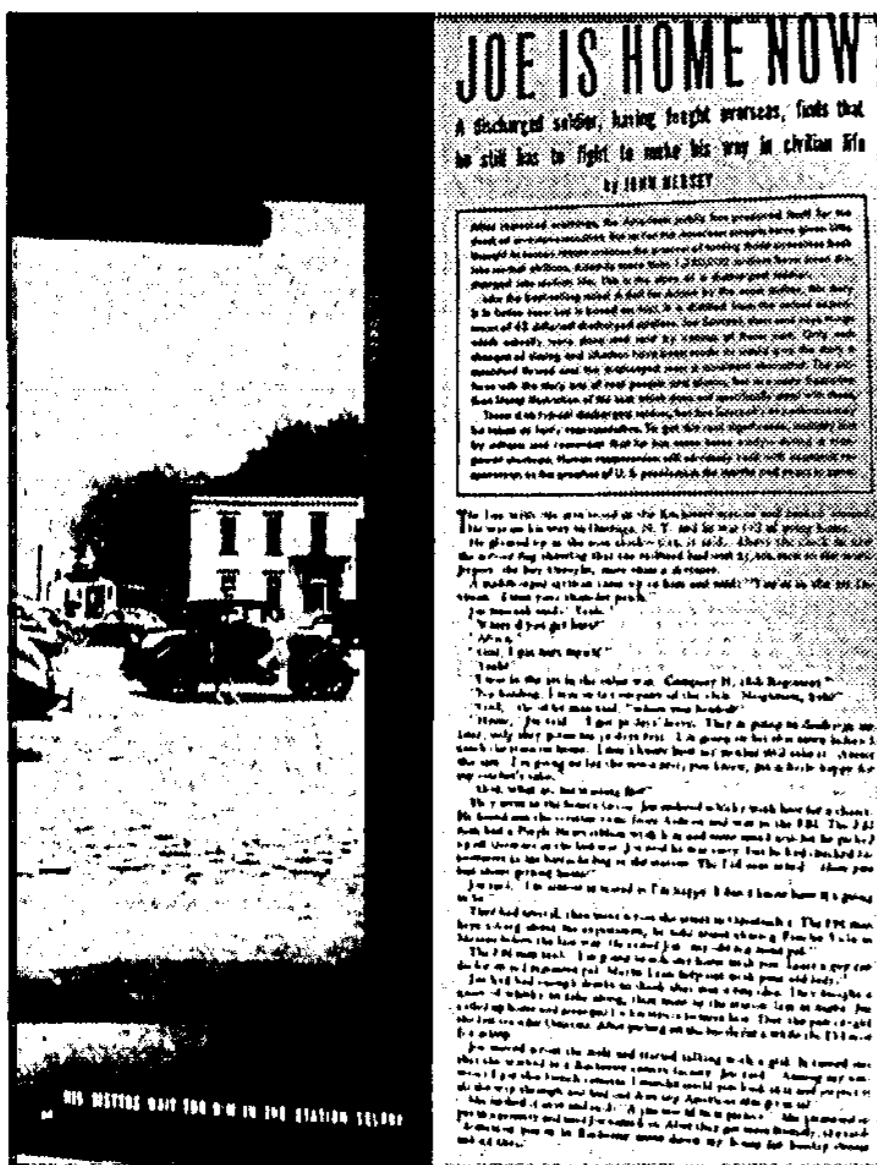
「いつもと変わらぬ家」1944年9月25日号

4. 『ライフ』における伝統的ジェンダー規範への回帰と人種と性の境界線の揺らぎ

しかし、女性表象における伝統的なジェンダー規範への回帰を報じる一方で、『ライフ』は戦争によって生じたジェンダーと人種の境界線の揺らぎも同時にとらえている。まず男性表象に関して言えば、表紙、記事ともに戦時中を通じて勇ましい軍人の姿や活躍が繰り返し取り上げられているが、1944年以降そうした愛国心や男らしさを象徴する軍人に加え

写真9

復員兵



「ジョーの帰還」1944年7月3日号

写真10

負傷兵



1945年1月29日号

て、傷病兵や復員兵の姿が取り上げられるようになる。まず、1944年6月3日号に掲載の「ジョーの帰還」という記事では、除隊して一般の生活に戻る負傷兵の苦悩が、43人の負傷兵に対するインタビューに基づいたフィクションという形で語られている。ここでは左腕を戦争でなくしたジョーが、戸惑いながらも、婚約者の献身的な支えを受けて、新生活に踏み出す姿が描かれている。この時期、こうした負傷兵に関する記事が、数こそそれほど多くないにせよ見られるようになる。さらに1945年1月29日号の表紙には戦時中を通じて初めて、「負傷兵のジョージ・ロット」として負傷兵が表紙に登場する。体中包帯に巻かれて看護師に介護されながらリハビリを受けたり、除隊後の新生活に苦悩するこうした負傷兵の姿は、戦時中の『ライフ』が繰り返し表象してきた「男らしい軍人」の姿とは対照的である。

またこうした男性表象にみられる変化に加えて、この時期のアフリカ系の人々に関する記事は人種の境界線の揺らぎを伝えている。記事としての登場回数を見れば、1941年12月から1942年12月まで4回、1943年1月から12月で13回、1944年1月から12月で9回、1945年1月から8月までの間で1回と、白人の男性と女性を扱う記事に比べれば、登場回数だけを見れば少ない。しかし、白人の男女と同じように、愛国的に食糧増産などの銃後での戦時活動に従事し、軍人として活躍するアフリカ系の人々をこの時期の『ライフ』は取り上げている。例えば1944年4月24日号では、アフリカ系初の士官を紹介する記事が掲載されている。こうした戦時活動に加

写真11



「アフリカ系初の士官」1944年4月24日号

えて、1942年3月や1943年7月にデトロイトで起きた大きな人種暴動に見られる、戦時産業に就くために都市に大量に移住してきたアフリカ系と白人の間に生じた衝突や、南部における投票権の問題なども『ライフ』は報道している。戦争を契機におこるアフリカ系の地位の上昇と、これまで圧殺されていた不満や怒りの噴出を扱うこうした記事は、戦争によって起こった、アメリカ社会における人種の境界線の揺らぎを示している。

こうした復員兵やアフリカ系の記事は、母、妻といったライフが伝える伝統的な女性像の背後に、戦中、戦後のアメリカの母性や女らしさと男らしさをめぐる人種とジェンダーの複雑な状況を想起させる。例えば、戦後のアメリカは、復員兵の自信回復のために、女性に優しさや服従などの女らしさを求め、男性性を強調する冷戦期にはさらにその傾向が強まる⁽⁹⁾。さらに、「男らしさ」と「母性」の関係でいえば、戦中から戦後にかけて、アメリカでは男らしい男子を育てられない、甘すぎる／強すぎる悪い母、いわゆる「マミー」

たちへの批判が高まる⁽¹⁰⁾。戦争によってもたらされたアフリカ系の地位の向上と不満は、やがて公民権運動へとつながり、人種問題はしばしば白人男性の不安と恐れと結び付けられる。このようなコンテキストで考えると、1944年以降『ライフ』で繰り返し強調される母や妻としての女性たちは、伝統回帰であると同時に、戦後のアメリカ人男性が抱える人種とジェンダーにまつわる不安の裏返しとしても見えなくもない。つまり戦争によって揺らいだ「男らしさ」を担保するものとしての「伝統的な女らしさ」の存在である。この時期の『ライフ』の表象にみられる家庭と母性の強調は、人種とジェンダーの伝統的な規範の復活を宣言していると同時に、そうした価値観が孕む矛盾も同時に照射していると言えるのではないだろうか。

結 論

ハニーは、第二次世界大戦期の急激なアメリカの女性のイメージの転換においてプロパガンダが果たした役割の大きさを示しつつ、以下のように政府主導のプロパガンダによってもたらされた新しい女性のイメージのもろさを指摘している。

It [The Conclusion] suggests that the war's failure to alter traditional ideas about female capacities was in part due to propaganda strategies for unifying the home front and to a top-down impetus for social change that left the new images vulnerable to swift annihilation (Honey, 17).

ハニーが指摘するように、戦時下の『ライフ』に登場する女性たちは、戦時のプロパガンダに沿うかたちで、従来男性領域であった軍事産業や軍隊に参入し、終戦が見えてくる時期になると男性領域から姿を消して、女性たちは新しく身にまとったイメージを捨てて妻や母といった伝統的なジェンダーロールへと戻っていった。

その一方で、ハニーと同様に戦時の労働力不足によってもたらされたアメリカの女性たちの男性領域への進出の意義について、ハニーと同様に様々な形での限界を認めつつも、この時代の女性の社会進出に、後の時代に起こるフェミニズム運動やジェンダー規範の書き換えの萌芽を見出している女性史家もいる。例えばハートマンは次のように、この時代に高まる社会での女性の労働の意義と高等教育の機会の拡大が1960年代のフェミニズムの再生の布石となったとしている。

The conservative forces of war, the antifeminist backlash, and a general desire for the “normalcy” denied by depression and war undermined the war's

potential for challenging sex role behavior and attitudes. Nonetheless, other developments of the 1940s—the growing importance of women’s work outside the home, the expansion of higher education, the substance of small body of feminists, the rise of civil-rights movement, and the growth of suburbia—laid the preconditions for an awakened womanhood in the 1960s (Hartman, 216).

戦時下の『ライフ』の女性表象のなかに、ハートマンが示すような1960年代のフェミニズムのはっきりとした予兆は見られない。しかし、『ライフ』が報じる傷病兵やアフリカ系の存在は、アメリカ社会におけるジェンダーそして人種にまつわる状況が、決して戦前と同じではないことも示している。『ライフ』は、創始者であるヘンリー・ルースが『ライフ』創刊の意義を“To see life”と述べている⁽¹¹⁾。戦時の『ライフ』にみられる既存のジェンダー規範の復活は、戦時の女性労働に関する政府の方針をなぞりつつ、同時に、戦争によって明らかとなる人種とジェンダーにまつわる矛盾を生きる生身のアメリカの一端を映しだしていたともいえるのではないだろうか。

註

- (1) Maureen Honey. *Creating Rosie the Riveter: Class, Gender, and Propaganda during World War II*. Amherst: The U. of Massachusetts Press, 19頁、84頁参照。
- (2) Tebbel, John and Zukerman, Mary Ellen. *The Magazine in America 1741-1990*, NY and Oxford: Oxford UP, 1991. 227-239頁、Hersteztein, Robert E. *Henry R. Luce, Time and The American Crusade in Asia*. Cambridge: Cambridge UU, 2005. 1-61頁参照。
- (3) Hersteztein, 38頁参照。
- (4) Honey, 211頁参照。
- (5) *Life*, 22 May 1944.
- (6) 佐藤、23-81頁、さらにHartman, 77-99頁参照。
- (7) Honey, 20-28頁参照。
- (8) *Life*, 9 August 1943.
- (9) この時期のアメリカのジェンダーをめぐる状況については、Evans, Sara M. *Born For Liberty: A History of Women in America*. NY: Free Press Paperbacks, 1997. 219-242頁参照。
- (10) 戦中、戦後に高まるマミイズム批判に関しては、Feldstein, Ruth. *Motherhood in Black and White: Race and Sex in American Liberalism, 1930-1965*. Ithaca and London: Cornell UP, 2000. 40-61頁参照。
- (11) Kunhart Jr, Phillip B. *LIFE The First 50 Years 1936-1986*. 5頁参照。

本稿は、2010年12月12日のジェンダー史学会第7回年次大会（於 お茶の水女子大学）で行った口頭発表に加筆訂正したものである。

参考文献

- Andreson Karen. *Wartime Women:-Sex Roles, Family Relations, and the Status of Women During World War II*. Westport, Conn.: Greenwood Press, 1982.
- Evans, Sara M. *Born For Liberty: A History of Women in America*. NY: Free Press Paperbacks, 1997.
- Feldstein, Ruth. *Motherhood in Black and White: Race and Sex in American Liberalism, 1930-1965*. Ithaca and London: Cornell UP, 2000.
- Hartman, Susan, Suzan M. *The Home Front and Beyond: American Woman in the 1940s*. Boston, Twayne, 1982.
- Honey Maureen. *Creating Rosie the Riveter. Class, Gender, and the Propaganda during World War II*, Amherst, University of Massachusetts, 1984.
- Hegarty, Marilyn E. *Victory Girls, Khaki-Wackies, and Patriotutes: the Regulation of Female Sexuality During World War II*. NY and London: NY UP, 2008.
- Kunhart Jr, Phillip B. *LIFE The First 50 Years 1936-1986*. Boston and Toronto: Little Brown and Company, 1986.
- Tebbel, John and Zukerman, Mary Ellen. *The Magazine in America 1741-1990*, NY and Oxford: Oxford UP, 1991.
- Winker, Allen M. *The Home Front U.S.A: America During World War II (Second Edition)* Weeling Ill.:Harlan Davidson Inc., 2003.
- Hersteztein, Robert E. *Henry R. Luce, Time and The American Crusade in Asia*. Cambridge: Cambridge UU, 2005.
- Waker, Nancy A. ed. *Women's Magazines 1940-1960 : Gender Roles and Popular Press*. Boston: Bedford/St.Martin Press, 1998.

敬和学園大学戦争とジェンダー表象研究会編『軍需主義とジェンダー 第二次世界大戦期と現在』インパクト出版、2008年

佐藤千登勢著『軍需産業と女性労働 第二次世界大戦下の日米比較』彩流社、2003年

マイケル・S・スウィーニィ著『米国のメディアと戦時検閲 第二次世界大戦における勝利の秘密』法政大学出版局、2004年